ラブカクテルス　その６６

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その６６

【Ｎコード】

Ｎ３７２３Ｅ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は粘り強いカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はズルイ男でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は頬を赤くした。
目の前には、このところ毎朝目にする顔がある。

いらっしゃいませ。

私はなるべく他のお客様に差別を感じさせないように笑顔を作り対応した。
しかし、それがわざわざ仕事のために作ったものでなく、自然にできてしまうものだという印がこの赤い頬だ。
ここだけは未だにコントロールできないでいる。
そう、私は恋をしている。
この、毎朝コーヒーを買いに来るお客様に。
当然の片想いだった。

私は駅前のファーストフードの店でレジに立ち、毎朝通勤で忙しそうな方々の朝食や、飲み物の注文を用意する。
アルバイトだ。
面接の時にこの店のマニュアルを基に、接客の時の礼儀を教わり、どんなお客様にも笑顔を絶やさないようにと教育を受けた。
毎日鏡の前に立ち、いらっしゃいませを言いながら笑顔の練習をしたものだ。
店長曰く、自分の笑顔に自信が着けば、今より自分を好きになると言ったが、確かにそうだった。
私はアルバイトを始めてからは、かなりポジティブな性格になれた。
人前でこんな私があんなにも笑顔を作りながら、はっきり人と向き合えるなんて、思ってもみていなかったから。
それまでの私は、周りからの目が何だか気になって塞ぎがちだった。
しかし今は店長の言った通り、自分自身を好きになってきていた。
お店にもやっと慣れて、気持ちもそんな風に余裕すら出てきた頃、彼が毎朝お店に来るようになった。
私は彼に一目惚れだった。
スラッと伸びた長身、少しエスニックなキレのある顔立ち、甘く低い声、そしてどこか影のある表情。
一発ケイオーだった。
それから毎朝の楽しみは彼の接客になり、混雑している日に私の担当しているレジに彼が並ばず、隣の子のところに行ってしまった時などは、一日中気持ちがブルーで、仕事で作らなければいけない笑顔も、なかなかうまくできずにいた。
そんな彼が顔を見せるようになってから一ヶ月ほど経ったある日、その日の朝は彼が私のレジに着いた。
彼のオーダーは、いつもブレンドに砂糖とミルクを一つずつだ。
その日、私は思い切って彼に向かって、いつものでよろしいですか？と、満面の笑顔で応対した。

彼は初め、少し驚いたが、続けて私が砂糖とミルクを中にお入れしても構いませんか？と尋ねると、少し戸惑ったものの、笑顔を作り、ありがとうと言ってくれた。
私はご機嫌で、そのサービスをし、マドラーを回すその手は震えていた。
彼は、そのコーヒーカップを手渡されると、いつもと同じように爽やかに店を後にし、私はその背中に、ありがとうございました。またのお越しをおまちしていますと、通った声で言った。
私はこの大きな一歩に自分を褒めた。
よし、これでキッカケを作れた。焦らず少しずつ近づいて行こう。
その日の私の笑顔は最高に輝いていた。

私は昔から男の人の気持ちが何となく読める。
彼はそれから、毎朝私のレジの列に並び、おはよう、いつものね。と、それが挨拶となった。
なんだかんだ言っても、積極的に女性の方から話し掛けられるのは、男の人にとっては必ずしも悪い気がしないはずだった。
私はそれを知っている。
そして、そんなこんなで一週間ほどすると、私は空いている時間に彼が来ると、何気ない天気の話しをしたり、送りの挨拶の時に、行ってらっしゃいとか、気をつけてなどの親近感を持たせる言葉へと変えて、その気持ちの距離を縮めていった。
しかし事件が起きた。
その日は、なぜだか朝なのにも関わらず、学生の団体が押し掛けてきたおかげで、私のレジの列がやたら混み、長蛇の列がしばらく捌けずにいた。
そろそろ彼の来る時間だ。
しかし私の前にはまだ五人程の学生が話しを楽しみながら並んでいる。
するとそこに彼がやってきた途端、私の隣のレジが空き、店内はな

ぜか私の列しかお客がいない状態で、それを見た彼は、私の事をチラとも見ずに、空いている隣に着いた。
そのレジにいたのは、この店では誰が見ても一番かわいい、明るい彼女がいた。
そして彼女はというと、なんと少し甘い声で、いつもの私と同じ事を言ったのだった。
いらっしゃいませ。いつものでよろしいですよね。
彼は私に見せるよりも、優しい笑顔を彼女に洩らし、何気ない世間話までをすると、カップを持たない手を軽く上げて、軽やかに出て行った。
私が苦労して、やっとできたことを彼女は私を踏み台にして、まんまとオイシイところを浚っていったのだった。
あまりに酷い運命のイタズラだった。
私は思わず、その学生達に向ける顔に笑顔を作れずにいた。
それから彼の並ぶ列は彼女の列になり、よほど混雑している時以外、私の前に来ることはなかった。
私は思った。このままではうまくない。
何かいい方法を考えなければ。
そして私は苦肉の策に出たのだった。

確かに勝負は着いていた。
私は大して顔が言い訳ではなかった。
彼女は可愛く、女の子の武器をいくつも備えていた。
そして周りの話しだと、かなりの男歴があるようだった。
さすが、モテる女は辛いといったところだ。
しかし私は先手を打った。
それは、彼に渡すコーヒーのカップの底、それに細工をすることだった。
私はその日、店をあがる時にカップを二、三個バッグに入れて持ち帰り、部屋でその底に油性マジックで携帯のメールアドレスを、そ

して、失礼だと知りつつも、書いてしまいました。よかったらメールお待ちしていますと、メモを底の裏に書き、その何日か後の朝に訪れた絶好のタイミングを見計らい、計画を実行した。
確かにその朝の彼のレジはいつもと同様に彼女のところだったが、私は他のお客のオーダーの支度をするついでに、彼女のお客である彼のコーヒーを、その用意していたカップに入れて、手際よい連携プレーに見せかけて、彼には見えないように彼女にそれを手渡した。
彼女は私に礼を言いながら、彼との会話に戻って楽しみ、いつも通り砂糖とミルクを入れてあげるサービスをして、そのカップを彼に渡した。
私は思ったより早く訪れたチャンスがうまい具合に流れ、心の中で思わずガッツポーズをした。
しかし彼はカップの底の誘惑に気づき、乗ってくるだろうか？
私はハラハラしながら仕事の終わる時間を待った。
私は恐る恐る、控室のロッカーに置いていた携帯を手に取り、メールの着信を見た。
見事、彼は釣れたのだった。

私は男の人の気持ちがわかる。
ヒソヒソとした、秘密めいた関係に男は弱い筈だ。
私は彼のメールを見た。
こんな仕掛けには驚いたよ。ありがとう。僕も君が気になっていたんだ。よろしく。
爽やかで好印象の内容。
さすが、私が見込んだだけはある。
私は彼が望む彼女を演じてメールを返す。それが作戦の始まりだった。
できればあなたの事を少し教えて欲しいの。お互いにゆっくりメールで付き合いながら近づいていけたらなんて思っているの。いかがですか？

私は焦らず、まずはジラしながらこちらから目を離されないように切り出した。
彼の返事は、それを受け入れて、丁寧でわかり易い自己紹介となって送られてきて、私はそれに対し、お店では普段と同じ接し方をしてくれることを条件に、かなり私の都合がいい自己紹介を返した。
誕生日は、彼と一番相性が悪い星座の月だし、血液型にしてもそういう理由のものを選んだ。
趣味はパチンコに麻雀。それにブランド品集めと、なるべく男の人が嫌いそうなものをチョイスして、返信。
まんまとその夜は彼からメールの返事はなく、私は手を合わせて謝りながらも、クスクスと笑ってしまった。
次の朝の彼は、いつもと違いがなかったが、でもどこか元気がない様子で、彼女はそれを心配そうにして見ていた。
私はその原因と、話の筋が自分だけわかっていることに、彼には気の毒ではあったが、いい笑顔を作れる元となっているのがわかった。

その日の休み時間、私は作戦の第二段階へと進んだ。
わざと店長を呼び出し、相談があると言った。
それは、例の彼女が店長に、実はホの字で、それを打ち明けられないで悩んでいるらしいと言う、とんでもない嘘を告げて、舞い上がった店長を利用しようと言う手だった。
店長はどう見てもモテるタイプではなく、きっと今までの店長の人生で告白されたことなどは一度たりともないことだろう。
告白したことは数知れずあるだろうが、その想いがビリビリと破れたほとんどの人生の恋愛歴が、その角ばって諦めに入っている姿にいやでも映りだされていた。
店長はガチガチに固まりながら、顔を赤くして、からかうなと始めは信じなかったが、私は迫真の演技で店長にニセの深い愛を訴え続け、とうとうこちらのペースに引き込んだ。
シメシメ。私は男性の気持ちがよくわかる。

かわいい子から片想いされて黙っているブ男がいる筈がない。
全てが計画通りに動き始めた。

それから彼には、偽彼女メールをうまくつなぎながら、チクチクとその感覚の違いを刺し、店長には後ろからテコを入れた。
そのおかげで彼女と接する彼と店長の関係は複雑なものとなっていき、その何も知らない彼女はと言うと、そんな彼らに首を傾げるばかりだった。
そろそろ私はとどめを打つことにした。
私は男と言う生き物の気持ちがわかる。
ある朝、私は店長をいつもと同じ様に呼び出し、この頃毎朝訪れる客の一人、つまり彼が彼女に好意を持ち、モーションを掛けてきていて、彼女の心が揺らぎそうだと言った。
それを聞いて落ち込む店長に、私はいつものように背中を押し、いい方法があると駆り立てた。
それは、彼が店に訪れた時に、ワザと彼女と店長の仲が普通ではないような仕草をして、お前には渡さない。俺と彼女は既にデキているという、堂々とした態度を見せつければ、きっと彼は尻尾を巻いて逃げ出すに違いないというもので、その詳細を私は店長にアドバイスした。
そして当然彼に、それがうまく見せつけられれば、彼女は自分ではない、店長といういつも近くにいる人間に好意があると、自分の立場の不利さを悟り、彼はガッカリして彼女を諦めるに違いない筈だった。
そしてそれには、さらなる細工を私は仕込んでいたのだった。
それが昨夜彼に送ったメールにあった。
偽彼女は、今までのメールのやり取りから、実はこの頃、うちの店の店長が好きになってしまって、彼とは性格や血液型、そして星座までもが相性ぴったりなの。ごめんなさい。
と、まさにとどめの一発を送っておいたのだ。

当然、彼からの返信はなかった。
そして店長は、彼が来る時間の少し前から、ヤケに親しげに彼女に接し始め、彼女の困った顔などお構いなしで、仕事のサポートや余計な声掛け、まさに気がありありの仕草を繰り返し行い、そしてついに彼が来た瞬間、店長が肩に優しく手を掛けようとした、その時彼女に向かって言った彼のオーダーは、
君の人生プリーズだった。
店長は固まり、店は一瞬にして静かになり、彼女は頷き、私は、持っていたトレーを床に落とした。

やはり恋心とは、予測不可能なことばかりだ。
結局私は二人の愛のキューピットになり、彼と彼女は付き合い始めた。
店長はあれから肩の下がっていない日がなくなった。
そして私といえば、
まだ諦めた訳ではなかった。
きっと、後二、三ヶ月もしたら、彼はだんだんと彼女に慣れてきて、
そして挙句には飽きる筈だ。
そして、別の女も欲しいと思うに違いない。
私にはわかる。
なぜなら私は昔から、男の心の中が手に取るようにわかるからだ。
なぜかって？
なぜそんな事が言えるのかって？
何せ私は元、男。
皆には内緒だけど、実はそうなのである。
だからわかる。
さーて、今の内に女らしさをもっと磨いて彼のその時に備えて頑張らないと。
女以上の女になって彼を誘惑しなくっちゃ。
ウフフ。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3723e/

ラブカクテルス　その６６

2010年12月29日23時46分発行